

蔡の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館 外山 徹

放生会執行の謎

五代藩主吉宗が將軍に転出した後、伊予西条藩主松平頼政が六代藩主に就き、徳川宗直と名を改めた。この宗直の時から紀州家と葉王院との関わりが始まったことになる。

不動尊像の寄進

天保七年(一八三六)に作成された紀州家との関係を示した由緒書には次のような記事がある。

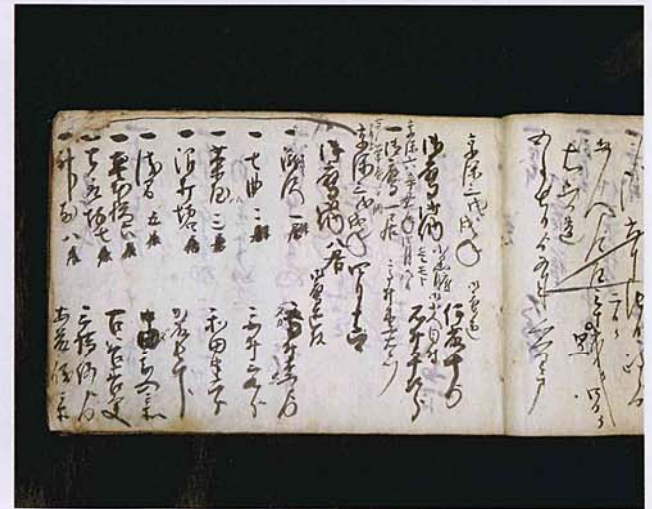
- 一、享保三戊年 宗直様より 根来山興教大師之作 不動尊 一 護摩檀 一通 但し、両童子附木像 但し、右尊前に 爾今飾り置きあい 用いそつらう事
- 何分にも一八八〇年以後

に記されたものだけに、歴史研究者の常識としてこれは字句のままに受け取るわけにはゆかない。何等かの記録が元になつているのかもしれないが、それが特定できない限りは伝承として提示するしかないのだが、脇侍をともなう不動尊像としては現在奥之院不動堂に祀られた木像がある。像高一・九センチと山内で一番大きな不動尊像である。様式から鎌倉後期の作と評価されているが、俊源中興の以前、高尾山の荒廃期にあたり、後世外部から持ち込まれた像と考えるべきである。実は嘉永七年(一八五四)の届書に宗直寄進の不動尊は護摩堂に安置しているとの記事があり、護摩

堂とはすなわち現在の奥之院不動堂のことである。しかしながら、平安時代後期の人物である興教大師覺鑊とはやや時期がずれる。一方、平安後期と推定される頭部の不動尊像も伝わっている。興教大師作、宗直寄進、それが不動尊像であるという情報がさまさまに解釈された結果、前記のような結論となつた可能性もある。いろいろと憶測されるもの、結局結論が出る話ではないのだが、その仏像がどのような来歴で葉王院に伝わっているのか想像を巡らしてみるのは一興である。

享保三年の放生会

つづいて、由緒書には、「同年四月十六日、飯繩権現へ宗直様より御鷹八居御奉納遊ばされ」として、八名の鷹匠の名と山内の地名が列記されているのだが、この記事は実際に同時代の史料に裏付けられる。享保元年(一七二六)からしばらくの



「年々諸用記」に記された鷹匠衆の名 彼らは確かに高尾山に来ていた

- 間書き継がれた備忘録とも言うべき「年々諸用記」という書物があるのだが、その文中には、
享保三戊戌年 御鷹御納小黒附香毛ト 御鷹匠伊藤十右衛門とあり、さらに詳細に、
四月十六日 御鷹御納八居

- 一、滝沢 一居 御鷹匠頭 高井李右衛門
- 一、七曲 二居 宮井三九郎
- 一、茶屋 三居 和田半六郎
- 一、沼打場 四居 加藤長十郎
- 一、浅間 五居 中田甚五兵衛

一、吉本橋 六居 古谷善太夫 七居 三橋山右衛門 八居 安藤儀兵衛

と書かれている。「七曲」は金毘羅社の下あたりなので、「滝沢」とはかつて布流滝のあった二号路沿いの谷筋となる。「茶屋」は金毘羅社のそばにあった。「沼打場」は不明だが、「浅間社」はエコーリフト降り場近辺の小高い山(現在地不明)。「本橋」「土取場」と不明だが、「神前」は御本社飯縄宮のことだろう。これほど詳細な情報が口伝で伝わる筈もなく、元となる記事があったわけである。すなわち、同時代の史料に見出されたことから、この享保の放生会は史実として受け止めたのだが、後に二つの疑問が浮かんだ。もう一通、この「御鷹御納」と同様の記事が天保四年八月付で代々山主の事績を記した由緒書の中の一四世秀

永代の記事にあるのだが、同三年戊戌七月十一日 有徳院様御朱印拜受、同年四月十六日 放生会御奉納 と、この行事を「放生会」と呼んで同様の鷹匠衆の列記がある。ここに紀州家の名はなく、文意をそのまま取れば有徳院、すなわち將軍吉宗の奉納と読める。当初、紀州家の奉納をより上位の將軍による読み替えたのかと思つたが、先の紀州家の由緒書の方が三年後の記事である。そうするとむしろ紀州家による放生会というのとは後からの解釈ということになる。

当然鷹匠の素性が注目されるが、伊藤、宮井、加藤、中田、三橋、安藤の六名は幕府の鷹匠であることが確認されていた。そして、「鷹匠頭」という肩書の高井だが、「柳營補任」には同時期の鷹匠頭として戸田五助勝房の名がある。実は高井の「高」の字は修正の上「夕カ」のルビが付されている。

この時期の高尾山における放生会は、地先の上柵田村旧家の日記にも記されている。享保六年四月十七日の記事に「この日高尾鷹離、鷹匠来る」とあり、同日二月一〇日には「この日高尾山鷹匠衆参り御泊まり」とある。日記の主は八王子千人同心であり、幕府役人の動向には敏感であった。將軍による放生会は五代綱吉が取り止めた後、八代吉宗が復活させているが、高尾山に程近い八王子には以前に鷹部屋が設置されていた(後に復興)。鷹狩が復活して二年あまりの時期、鷹匠は鷹狩りに備えて鷹の訓練に励んでいた筈である。ということ、高尾山近辺にもたびたび訓練に訪れる機会があったのではないかと、「年々諸用記」にも旧家の日記にも「放生会」という書き方はなく、「鷹納」「鷹離」「鷹放」とあるだけである。わざわざ殺生禁断の地で鷹狩りの訓練というの

にも首をひねる。これは推測であるが、実際に獲物を狩るというのをしないが故に「御納」すなわち放生会という解釈になつたのではないかと、また表参道上の八ヶ所地点がわざわざ記される儀式ばつた形は、単なる訓練とも片付け難い。

この放生会の記録はその詳細に不明な点は多々あるものの、後世の記録が複数の同時代の史料に裏付けられたという点で、歴史のリアルとミッシングを感じさせるエピソードである。

《参考文献》安田寛子「高尾山葉王院と紀州藩」(村上直編「近世高尾山史の研究」名著出版、一九九八)

おことわり 前回の参考文献に笠原正夫「紀州藩の政治と社会」(清文堂、二〇〇二)を追加します。なお、本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。